

生涯学習研究所研究紀要「生涯学習研究と実践」の あゆみ

著者	谷川 松芳
雑誌名	生涯学習研究と実践：北翔大学生涯学習研究所研究紀要
巻	12
ページ	127-144
発行年	2009
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002211/

生涯学習研究所研究紀要「生涯学習研究と実践」のあゆみ

The Record of Bulletin of the Lifelong Learning Research Institute Hokusho University

谷 川 松 芳

TANIKAWA, Matuyoshi

1. はじめに

北翔大学生涯学習システム学部付設の生涯学習研究所は大変残念ではありますが平成21年3月31日をもって閉所することになりました。生涯学習研究所は、平成9（1997）年12月に開設され、以来12年間にわたって生涯学習に関するさまざまな研究活動が行われてきました。特に、生涯学習概念に関する研究及び教育学としての学術研究においては、本学の教職員及び学外研究員、北海道内外の市町村行政職員及び学校教育関係者など多くの方々による、さまざまな視点からの研究論文発表や実践活動報告などが行われてきました。

さらに、本研究所の目的の一つでもあります生涯学習推進の支援活動におきましては、本学の人材でもあります教職員が一丸となり、市町村の生涯学習推進や地域での学習会、研修会、講座、学級などに積極的に出かけ、さまざまな生涯学習活動や普及活動にご尽力いただきました。これらの生涯学習支援活動が結果的には、まちづくりや地域づくりに貢献してきたことになります。一方、生涯学習研究所の要の一つでもあります研究紀要の発行は、平成13（2001）年3月に創刊号を発行してから今回の最終号となる第12号まで発行してきました。

このたび、生涯学習研究所が北方圏学術情報センター「ボルト」に発展的統合されることとなりますので、今まで生涯学習研究所研究紀要として発行されました「生涯学習研究と実践」の発表作品と制作者及び研究論文、実践研究、実践報告と執筆者一覧を作成いたしました。

研究紀要の内容につきましては紙面の関係上省略させていただきますが、各号の目次一覧を掲載させていただきましたので、各号の作品発表の題名や特集論文、一般論文の研究課題や実践研究報告テーマなどから、それぞれの特徴を見ることができると思います。また、この研究所の設置目的や生涯学習社会の実現に向けた高等教育機関としての役割や使命などについても創刊号に掲載されておりますので、そのまま掲載させていただきます。本研究紀要の体裁にあたっては、作品創作の実践面を重視するために作品発表を巻頭に配し、さらに、美術、音楽の順にするなど生涯学習社会の到来を予測する珍しい体裁になっています。また、論文掲載にあたっては、生涯学習全般に関することから始まり、学校教育、社会教育など教育学上の順とし、健康、医学、スポーツ、レクリエーション、衣食住などの論文に配置されています。このように、芸術・文化、健康・スポーツ、衣食住分野と生涯学習のかかわりを研究してきたこと

が生涯学習研究紀要の特徴になっています。

この8年間の「生涯学習研究と実践」のあゆみから、これからの研究課題として特に、人々の生涯学習活動を支援する役割や立場などについてより一層探求していかなければならないことも明らかにされております。

今後は、これまで生涯学習研究所が取り組んできた研究蓄積を北方圏学術情報センターの生涯学習研究部として引き継ぎ、継続的な研究活動に取り組んでいきたいと考えています。また、わが国における生涯学習研究は、生涯学習社会の実現をめざすためには道半ばの研究分野でもありますので更なる研究活動に傾注していきたいと思っています。

本学の学術研究として取り組んできた生涯学習研究と、その中核的役割を担ってきた生涯学習研究所の重責をふり返りながら、更なる生涯学習研究を探究するために「生涯学習研究と実践」の各号の作品発表・研究課題一覧をまとめ報告とさせていただきます。

2. 生涯学習研究と実践の概要

生涯学習研究所紀要「生涯学習研究と実践」は、生涯学習の学術的理論研究と生涯学習の実践的研究を併用したものとなっています。これは、創刊号発刊にあたっての中で、当時の生涯学習研究所所長でもあります藤原等教授が「大学と地域社会との紐帯を強めて、より幅広く実践的に研究活動を展開しようとする当研究所の姿勢の表明である」と述べているように、生涯学習研究は、生涯学習の実践的な活動から起因するものであることを強調されています。また、高等教育機関である大学の役割としては、地域と連携しながら地域発展に貢献できるような研究活動が必要であることと、生涯学習研究は学内研究に留まらず、北海道内、国内及び国際的比較研究による研究活動の必要性も述べられています。さらには、「将来的には小中学生、高校生などの作品発表もこの研究紀要に掲載していきたい」とも述べられているように、小中学生の芸術作品をも生涯学習研究の範疇に捉えていたことがわかります。また、研究紀要の体裁にも拘り作品発表編と生涯学習理論研究編及び北海道内外の生涯学習実践活動、国際的比較研究を大別した体裁となっています。

「生涯学習研究と実践」の概要としては、平成13（2001）年3月に創刊号が発刊されてから平成21（2009）年3月までの8年間にわたり12号まで発行してきました。表1で示したように作品発表においては、56人の制作者が56編の作品発表を行いました。一般研究論文においては、共同研究者を含めて223人の執筆者が157編の研究論文を発表されています。さらに、特別研究論文においては、報告も含め37人の執筆者が33編の研究論文を発表され、実に316人の研究者及び実践者が246編の作品発表と論文発表を行ったことになります。

このことは、生涯学習理論研究と実践的研究に積極的に取り組まれた蓄積でもあり、これからの生涯学習学研究はもとより、市町村における生涯学習推進方策及び地域住民の生涯学習活動などに大きな影響力を及ぼすことになると考えられます。特に、作品発表編を生涯学習研究紀要に掲載し解説などを取り入れた内容のものは、生涯学習研究としては珍しいものになってい

ますが、生涯学習の理念から捉えるならば、芸術作品の制作及び発表活動なども生涯学習として包括されることを誇張するものであります。紀要の表紙についても本学の元生涯学習システム学部長でありました阿部典英教授が創刊号から最終号の12号までのすべてにおいて、これからの生涯学習社会を目指すごとく、艶やかにも将来を見据えた素晴らしい作品で飾っていただいたことも、本学の生涯学習研究に対する熱意の現われと思います。

本学の生涯学習研究所としては、生涯学習の学術研究として福祉、芸術文化、体育・スポーツ、衣食住に関する分野を優位と位置づけしながら、さまざまな研究活動に取り組んでまいりましたが、今後もこれまでの研究実績を基盤としながら研究所の所期の目的を継承していきたいと考えています。また、これまで生涯学習研究所の所員、研究員、紀要編集委員としてご協力いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

表1 研究紀要発行年一覧

号	発行日	作品発表	一般論文	特集論文	頁数
創刊	平成13（2001）年3月26日	3人3編	15人15編		213
2	平成14（2002）年1月15日	3人3編	19人16編		242
3	平成14（2002）年9月30日	4人4編	18人18編		248
4	平成15（2003）年2月28日	5人5編	12人11編	8人7編	244
5	平成15（2003）年11月30日	7人7編	15人14編		242
6	平成16（2004）年2月28日	5人5編	29人10編	8人8編	265
7	平成16（2004）年12月20日	5人5編	17人14編		219
8	平成17（2005）年3月20日	5人5編	10人10編	6人6編	272
9	平成18（2006）年3月20日	5人5編	17人11編	5人5編	256
10	平成19（2007）年1月31日	5人5編	21人15編	4人4編	254
11	平成20（2008）年2月29日	6人6編	34人14編	5人2編	268
12	平成21（2009）年3月31日	3人3編	16人9編	1人1編	144
		56人56編	223人157編	37人33編	2,867

3. 創刊号発行にあたって（創刊号から抜粋）

生涯学習研究所所長 藤 原 等

生涯学習の概念が我が国に導入されておよそ30余年が経過しました。現代の我が国で、生涯学習が真に市民生活に定着したかどうかは正確な検証が必要です。確かに、1987年に「生涯教育」という言葉から自ら学ぶ「生涯学習」へと呼称の転換をみたことも、生涯学習を普及させる上で効果があったことは事実でしょう。その背景には、経済成長を遂げた我が国の、生活水準の向上により発生した余暇や労働に対する捉え方の変化、高学歴化等様々な複合的要因があると思われます。今日の社会は、学習社会とも言われていますが、それほどに学習を望む人は多く、そのための目的も機会も多岐に及んでいます。また、世界的な動向として少子高齢傾向

が進む近未来の社会では、生涯学習者の増加が推測されますが、それに対応する生涯学習支援者の養成が急務になると考えております。

そのような社会情勢に鑑みて生涯学習における総合的研究の推進を目的に、1997年北海道女子大学（本学の前名称）に生涯学習研究所が開設されました。その後、当研究所では、所員・研究員の分担執筆による生涯学習叢書1、『生涯学習社会の課題探求』を発行するなどの活動をしてまいりましたが、さらに、継続的に叢書の第2巻目の発行準備もしております。2000年4月に、大学名の変更、生涯学習支援者の養成を目的とする生涯学習システム学部の発足と同時に、所員・研究員総勢55名から成る当学部の付設研究所として再出発し今日に到っています。

新たな歩みを始めた当研究所の研究紀要の名称は『生涯学習研究と実践』ですが、これは、大学と地域社会との紐帯を強めて、より幅広く実践的に研究活動を展開しようとする当研究所の姿勢の表明であるとも言えます。大学内部での学問的理論研究に留まらず、時によっては特集を組み、北海道内の市町村で生涯学習に携わっている行政の方々や様々な生涯学習諸機関・諸団体の皆様の原稿、および、小中学生・高校生の作品等の掲載も計画の中に含んでいます。その構想の基底には、生涯学習の推進を図るためには地域社会と高等教育機関の連携が不可欠な要素であるということはもちろんですが、それは、換言すれば高等教育機関に対する社会の要請の一つであるとの考え方があります。また、今後は、国際的な比較研究などを通して広い視野から生涯学習を捉える研究も、個々の、あるいは共同研究の課題として検討されています。

このような基本概念に沿って研究紀要を公表するべく昨年来準備をしてきましたが、ここに創刊号を発行する運びとなりました。表紙の奥深い赤色の中の配置には、本研究所より生涯学習に関する多面的な研究成果を発信する芽吹きを示唆しているかのようにさえ感じさせられます。この研究紀要は、全道212市町村、全国の関連学部・学科を有する高等教育機関、生涯学習関連施設等へ配布されます。生涯学習における研究の中核になるのは、高等教育機関の役割の一つではないかと考えますが、我々の研究を世に問うのと併せて返す力により、理論と実践の融合を標榜しながら更なる研鑽を続ける所存であります。このような教育・学習機関同士の交流は、相互に高め合い、社会における生涯学習研究の位置付けを確たるものにすると同時に、生涯学習社会の深化に資するものと信じてやみません。

最後に、今、北海道における生涯学習の最大のテーマは「生涯学習の推進と地域づくり」であることを付言し、創刊にあたってのご挨拶をいたします。（2001年3月記）

4. 創刊号編集後記（創刊号から抜粋）

研究紀要編集委員 水 野 信太郎

平成12年4月に北海道浅井学園大学生涯学習システム学部が発足し、同学部に附属する機関と位置づけられた本学生涯学習研究所において、研究紀要を創刊することが決定されました。この事業を推進するため、藤原等所長の下で佐々木邦子研究所運営委員と私の2名が編集委員

を命じられました。この創刊号をまとめるに際して、基本方針とした大きな流れをここに述べて編集後記にかえたいと考えます。

まず研究紀要の判型ですが、このことにつきましては本学の人間福祉学部、生涯学習システム学部、短期大学部すべての紀要を通して大きさを揃えようとの提案が全学的に承認されました。その結果を受けて、ここに見られるような体裁をとりました。なお表紙のデザインについては、藤原所長からの依頼で、阿部典英学部長自ら新たな作品を制作して下さいました。

投稿された所員ならびに研究員諸氏の研究論文と芸術作品の掲載順は、本研究紀要の名称である『生涯学習研究と実践』を反映する意味を込めて、巻頭に作品を配することとしました。この編集方針によって、通常の研究紀要以上に実践面にも力を傾けている当研究所の姿勢を御理解いただけるものと考えます。

作品とそれに続く論文の掲載順は以下のようなものです。作品に関しては美術・音楽の順とし、美術分野の中では絵画・彫刻・工芸・デザイン・建築の順としました。本年は絵画部門2点、デザイン領域1点の発表でしたが、次号以降楽曲等の音楽作品が寄せられれば、美術作品の後に声楽、器楽の順で楽譜ほかを掲載するものと思われます。

論文の掲載順序は下記の通りとしました。論文発表の筆頭に位置するものは生涯学習全般に関わる内容で、このため本号では学校教育と社会教育、社会人教育などの教育学上の論文を配置しました。次は健康・医学ならびに人の成長に関連する分野ですが、本年は同領域に多数の論考が寄せられましたので対象年齢が幼いと見られる論文の順に編集しました。

引き続きスポーツならびにレクリエーション、さらに衣食住の部門です。今回は住および建築の分野に複数の論文が寄せられましたので、1棟のみの建築物単体を扱った内容を先にして、建造物群すなわち町並みを主題とした論文を後に載せました。

芸術の分野においては美術・音楽の順にし、それぞれのジャンル内の順番は巻頭の作品発表と同じ掲載順としました。そして本研究紀要全体の締めは再度、生涯学習社会全般に大きく関わる情報メディア部門の論文を配しております。本号の場合には、各種の情報を活用することのできる能力を育成するための本学における教育実践の論考に続いて、現在すでに大きな課題となっている市町村での生涯学習センターの設立手法に関する研究を掲載しました。とりわけ後者の論文は、本研究紀要の巻末を飾るにふさわしい新しい提言を数多く含んだ論文と言えます。

末尾になりましたが、本研究紀要の贈呈先を掲げて編集後記を終えたいと思います。北海道内すべての大学ならびに生涯学習関連の全施設、また道および212市町村の生涯学習担当部局へ研究紀要を送付しました。さらに北海道以外の都府県立生涯学習センター、大学において生涯学習・健康・スポーツ・芸術・メディアに関する専門課程や組織を有する全国の国公私立大学などにも発送致します。今後とも北海道浅井学園大学生涯学習システム学部ならびに生涯学習研究所への御理解・御指導を賜りますよう心より御願ひ申し上げます。

5. 北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要「生涯学習研究と実践」

1) 創刊号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

貝と遊ぶ	阿部 典英
「記シリーズ2000-3」制作ノート	野崎 嘉男
リゾートホテルのインテリアデザイン	杉山 宗英

論文

学社融合論の具体化に関する考察	山谷敬三郎
成人の学習に果たす継続教育の役割	
～都市部における成人のリカレント学習への要望～	佐々木邦子
生涯学習システムとプランニング、マネジメント	
～北海道における具体例の紹介を含めて～	藤原 等
自己決定とスキル獲得を促すセクシュアリティ教育	
～クイーンズランドのセクシュアリティ教育～	今野 洋子
大学生の保健行動の現状と課題	中出 佳操
子どもを持つ母親の意識の違いに関連する諸要因の考察	加藤 春子
Mt.Bullerスキー場（Australia）の現状とわが国におけるスキー環境の課題	竹田 唯史
ジャガイモの履歴書 ～南アメリカ～ヨーロッパ～日本～	前山 和彰
文科系学生たちの手による木造建築物の試作	水野信太郎
伝統的建造物群における観光行動を通じての生涯学習のあり方	
～秋田県角館町の事例を中心としながら～	菊地 達夫
テキスタイルワークと生涯学習及びその支援者の養成に関する一考	戸坂恵美子
ドイツの生涯学習～音楽においての実態～	岡元真理子
文化庁「国際音楽の日」に関する一考察	
～旭川市における平成12年度文化庁記念公演の実施を通して～	鈴木しおり
生きる力と情報活用	小杉 直美
市町村における生涯学習センター設立のための基本計画書の策定手順	山本 正八

※「生涯学習研究と実践」とは、大学と地域社会との紐帯を強めて、より幅広く実践的に研究活動しようという当研究所の姿勢の表明であります。本紀要では、各種の情報を活用することのできる能力を育成するための本学における教育実践の論考に続いて、現在大きな課題となっている市町村での生涯学習センターの設立手法に関する研究を掲載しています。とりわけ論文では、本研究紀要の巻末を飾るにふさわしい新しい提言が多くなっています。

2) 第2号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

ネエ ダンナサン あるいは壇	阿部 典英
記シリーズ 2001 (油彩)	野崎 嘉男
テーマパークにおける安土桃山建築の復元	水野信太郎
そして、春が来た	藤原 等
論 文	
盲兄A君の発達課題の一側面	
～リサーチ・ボランティア活動から、知的発達を中心にして～	藤原 等
地域の活性化と学生ボランティアの活動	
～大麻市民夏祭りの活動を通して～	村井 俊博 塩田 英樹
成人教育と労働に関わる現代的課題	
～日本におけるリカレント教育の意義の一端を探る～	佐々木邦子
育児支援体制について	加藤 春子
性の自己決定に果たす避妊教育のあり方	
～セクシュアリティ教育の中のテーマとして～	今野 洋子
ピアサポーター養成プログラムに関する一考察	中出 佳操
日本にける余暇行政 (2)	
～黒松内の町おこしにみる人づくり～	粥川 道子
生涯学習へ発展する体育授業の試み	
ーソフトバレーボールの指導を例としてー	竹田 唯史 北村 優明
路傍に見捨てられた植物 5題	
ーキクイモ・コンフリー・クレソン・セイヨウワサビ・アサーー	前山 和彰
学生たちによるホフマン窯を使用した煉瓦焼成	水野信太郎
地域資源の分布とその教材化	
ー小樽市伝統的建造物群を中心としてー	菊地 達夫
歌うYOSAKOIソーラン祭りの多世代交流	岡元真理子
姉妹校カナダ・レッドディア大学との学術交流に関する一考察	
ーD. トンプリン博士を迎えての授業「ピアノ基礎Ⅰ」「ピアノ表現Ⅰ」における取り組みー	鈴木しおり
音楽による異文化交流の一考察	藤原 等 塩田 英樹
情報科教育法に関する一考察	小杉 直美
問題解決技法における目的の確定の研究	山本 正八

※掲載した作品と論文については、いずれも生涯学習・生涯教育の研究・実践及び、それらに関する研究・実践であります。執筆者の専門分野が多岐にわたることから、様々な角度から生涯学習を捉えた多彩な仕上がりで特色を持った紀要であります。

3) 第3号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

ネエ ダンナサン あるいは原風景' 02	阿部 典英
記シリーズ 2002-5 (油彩)	野崎 嘉男
煉瓦と和風	水野信太郎
そして、流れて、桜と緑は… (写真)	藤原 等

論文

生涯学習社会において博物館が行う学習支援について その1

一 小中学校における「総合的な学習の時間」への支援一	三野 紀雄
生涯学習へ発展する体育授業の試み (2)	

一 高村泰雄の教授理論に基づく科学的授業研究の方法論一	竹田 唯史
働く人の生涯学習	

(イノベーション・地域プランナー・リーダーシップ)	三沢 光男
重複障害児Bさんの生涯学習発達の一側面	

一 リサーチ・ボランティア活動から、重さがわかる学習を中心にして一	藤原 等
学生が理想とする地域社会について (I)	

一 コミュニティ計画論の立場から一	村井 俊博
人づくり町づくりー市民参加型オペラの制作にあたってー	岡元真理子

問題解決技法における課題の確定の研究	山本 正八
健康心理面からみた夜間睡眠の特性	小田 史郎

長崎県佐世保市の歴史的煉瓦造建築物をいかしたまちづくり活動	水野信太郎
江差町における街並み環境整備事業と住民意識	

一 伝統的建造物群の保存と活用をめぐる一	菊地 達夫
市街地周辺の野鳥 7題ーカラス・スズメ・ムクドリ・ハト・ツバメ・	

カッコウ・ヒヨドリー	前山 和彰
------------	-------

生涯健康学習を目指す看護学カリキュラム展開	中出 佳操
性と生の教育の授業構築と展開に関する報告	

一 高校生対象の講座内容および展開例一	今野 洋子
生涯学習の視点から捉えた高齢者施設における音楽の活用	

一 質的リサーチによる福祉文化の向上一	鈴木しおり
運動が心理面に及ぼす影響	小田 史郎 藤原 等

思考が導く価値行動	田口 智子
-----------	-------

成人の学習に果たす継続教育の役割Ⅱ

一 N町における成人のリカレント学習への要望一	佐々木邦子
-------------------------	-------

※第2号に引き続き、掲載した作品と論文については、いずれも生涯学習・生涯教育の

研究・実践及び、それらに関する研究・実践であります。この号で初めて投稿された所員もあり、本紀要の内容が徐々に広がりを見せています。

4) 第4号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

ネエ ダンナサン あるいは 否・非・悲	阿部 典英
記シリーズ 2002-10 (油彩)	野崎 嘉男
眼を閉じて	林 亨
煉瓦と現場	水野信太郎
そして、夏が来た	藤原 等

論文

特集論文 「地域社会における生涯学習の課題と展望」

北海道における生涯学習推進施策～国の施策との関連から～	阿部 豊
社会教育行政の課題と今後の展望	

～全道社会教育主事等研修会の歩みから～	柴山 能彦 樟山 行彦
地域における生涯学習の推進	

～学校教育と地域の連携の在り方～	小向 敏文
生涯学習社会における「道民カレッジ事業」	長田 和夫
札幌市生涯学習センターにおける学習相談にみる市民の生涯学習の現状	

～平成13年度の事例より～	吉田 有見
生涯学習と博物館	

～上湧別町ふるさと館JRYの実践から～	中村 齋
民間スポーツクラブの運営について	

～札幌市内のAスポーツクラブを例として～	上田 知行
一般論文	

キャリア開発における公共職業教育の役割に関する一試論	三沢 光男
コミュニティ・ダンス・ワークショップにみる生涯学習社会における	

学習形態について	増山 尚美
学校教育期間における地域資源の活用実態	

～北海道江差町を事例として～	菊地 達夫
問題解決技法における解決策の確定の研究	山本 正八

学生たちの旧発電所遺構整備ボランティア	水野信太郎
学生が理想とする地域社会について (2)	

～コミュニティ計画論の立場から～	村井 俊博
大学生の性意識・性行動に関する報告	

～A大学の学生を対象とした調査報告～	今野 洋子 佐々木浩子
--------------------	-------------

生涯学習における青年期の課題	中出 佳操
生涯スポーツ・スキーに関する技術分析	竹田 唯史
睡眠前の体温変動が入眠に及ぼす影響	小田 史郎
健康に暮らすための水	前山 和彰

※地域社会における生涯学習の課題と展望と題し、学外執筆者による特集を組んでいます。これは、本研究所が標榜する地域社会との連携の一つになるものと捉えられ、このような活動を支援することが生涯学習の振興に寄与するものと思われます。

5) 第5号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

ネエ ダンナサン あるいは 友への手紙' 03	阿部 典英
記シリーズ 2003-6 (油彩)	野崎 嘉男
眼を閉じて	林 亨
序 曲	戸坂恵美子
続・煉瓦の現場	水野信太郎
尾張地方の町家	野口英一郎
それから、秋が来た (写真)	藤原 等

論文

山陽・北四国地方の歴史的煉瓦建築とまちづくり	水野信太郎
初等教育教員養成課程における町づくり環境学習の実践とその効果	
ー社会化地域教育からの発展的アプローチとしてー	菊地 達夫
美濃市町家の修景保存計画 その1	
(岐阜県美濃市の調査概要)	野口英一郎
北方圏の集会時におけるリレーショナルデータベースと連動した	
携帯電話ホームページを活用した双方向データ通信に関する研究	山本 正八
弱視児Cさんの生涯発達の一側面	
ーリサーチ・ボランティア活動からー	藤原 等
音楽と子供文化のあり方	岡元真理子
地域の活性化を促進する音楽の振興 I	
ー利尻富士町・雪蟲コンサートを中心にー	村井 俊博
地域社会における音楽活動の考察	
ー旭川市「ネージュ・コンセル (雪のコンサート)」の事例 その1ー	鈴木しおり
養護実習のあり方に関する研究 (1)	
ー養護実習に向けての学内実習および事前指導のあり方についてー	今野 洋子
生涯学習に発達する体育授業の試み (3)	
ー女子大学生を対象としたソフトボール授業についてー	竹田 唯史

中等度強度の水中エアロビクス実施が深部体温に及ぼす影響……………小田 史郎
 山梨大学における学生主体型授業「アウトドアパスーツ」の評価……………山田 亮 川村協平
 身近にある毒草 9 題……………前山 和彰
 継続教育の観点から若年労働を考える

～キャリア・エデュケーションから継続教育へ～……………佐々木邦子

※作品 7 編と論文 14 編が掲載されているが、生涯学習研究を柱として、非常に多様な分野からの取組みが報告されています。生涯学習のもつ無限の可能性と広がりを改めて実感させる紀要でといえます。

6) 第 6 号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

ネエ ダンナサン あるいは 彼方から……………阿部 典英
 記シリーズ 2003-5 (油彩)……………野崎 嘉男
 眼を閉じて……………林 亨
 紙と煉瓦たち……………水野信太郎
 それから、秋が来た (2) (写真)……………藤原 等

特集論文

カナダにおける生涯学習の概観……………B.Mヤング
 モンゴルの教育制度と遠隔教育の発展……………ガルサンジャムツ・ウルツィネメフ
 中国における大学と継続教育

～哈爾濱工業大学における継続教育の現状～……………耿 鉄珍 戴 玲
 イギリスにおけるソーシャル・インクルージョン

－日本における生涯学習の課題－……………佐藤 貴虎
 New York州Westchester County (郡) 行政省

“Department of Parks, Recreation & Conservation” における Summer Camp

－『Westchester Summer Music Center (夏期音楽教室)』の取り組み－……………塩田 英樹
 ネパールに生活して

－シニア海外ボランティアで視覚障害者指導の 2 年間－……………竹内 亮二
 フィンランド・イナリサーミによる母語存続運動……………水本 秀明

一般論文

視覚障害児が自己実現を目指すための学習法に関する研究 (1)……………藤原 等
 生涯学習における命の教育実践と評価に関する一考察……………中出 佳操
 生涯学習系学部生の博物館資料整備ボランティア……………水野信太郎
 女子大学生を対象としたソフトボール授業の指導プログラム……………竹田 唯史
 北方圏住民の参加型地域行事に関する教育人間学的研究

～北方圏における地域文化の伝承に関する調査研究の中間報告～……………山谷敬三郎 (代表)

B.M.ヤング 佐々木邦子 藤原 等 末岡 一伯 小田 史郎 山田 亮
 耿 鉄珍 高田 紀子 塩田 英樹 水本 秀明 川上セイヤ オウティイハライネン
 北海道における高齢期女性の着意意識と生活行動に関する研究

……………永田志津子 富田 玲子 北村 悦子 泉山 幸代
 辻 恵美子 大信田静子 福山 和子 高岡 朋子
 学校教育に生涯学習を適用する方法に関する研究……………山本 正八
 養護教育のあり方に関する研究（２）

－養護実習の実習校における評価および学生の自己評価をもとに－……………今野 洋子
 伝統的建造物群を活用したまちづくりについての住民評価

－北海道江差町を事例として－……………菊地 達夫
 美濃市町家の修景保存計画 その２

（岐阜県美濃市の町家について）……………野口英一郎

※国際化が進み、国際交流、異文化交流が盛んに叫ばれている今日において、諸外国の
 生涯学習に目を向けることが、日本の生涯学習社会の発展には不可欠であると考えら
 れます。本号では、「諸外国の生涯学習」と題し、海外の生涯学習及び、教育事情に精
 通されている方々の協力により、特集を組んでいます。

7) 第7号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

ネエ ダンナサン あるいは 再誕……………阿部 典英
 記シリーズ〈北方〉 2004－5（油彩）……………野崎 嘉男
 眼を閉じて……………林 亨
 北海道の煉瓦……………水野信太郎
 冬の終わりから春へ、そして夏へ（写真）……………藤原 等

一般論文

地域社会における音楽活動の考察

－旭川市「ネージュ・コンセル（雪のコンサート）」の事例 その２－……………鈴木しおり
 レジャー行動分析の為のアセスメントツールに関する研究（２）……………粥川 道子
 大関 慎 増山 尚美
 組織キャンプにおけるベネフィット・セグメンテーションの検討……………山田 亮
 北海道における生涯スポーツ支援についての事例研究

～NPO法人サホロススポーツクラブについて～……………竹田 唯史
 生涯学習社会における携帯電話ホームページ制作の教育法に関する研究……………山本 正八
 生涯健康教育の試み

－高校生への出前講座より－……………中出 佳操
 北海道における子どもの心の健康問題に関する報告

－教師から見た子どもの変化と保護者の変化－……今野 洋子 佐々木浩子 瀬川美恵子
 子育て・子育てのライフストーリー（１）……………請川 滋大
 視覚障害児が自己実現をめざすための学習法に関する研究（２）……………藤原 等
 わが国における派遣型労働の価値に関する現状と問題の分析……………田口 智子
 開港場・横浜市における赤煉瓦建築の再利用と

先駆的まちづくりに関する調査・研究……………水野信太郎
 伝統的建造物群を活用した観光空間の基盤とその特色

－山口県萩市と島根県津和野町の場合－……………菊地 達夫
 美濃市町家の修景保存計画 その３

－岐阜県美濃市の町家の正面について－……………野口英一郎

※非常に多彩な分野からの取組みが報告されています。音楽、生涯スポーツ、生涯健康、障害児の自己表現、伝統的建造物などの研究も生涯学習研究とされています。

８）第８号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

頭足類動物をモチーフにした造形……………阿部 典英
 記シリーズ 2004－3（油彩）……………野崎 嘉男
 眼を閉じて……………林 亨
 和紙問屋の屋敷構え……………水野信太郎
 夏から秋へ（写真）……………藤原 等

特集論文

まちづくりと生涯学習

－厚田あったか夢プランの策定とその実践－……………河地 良一
 地域活性化の実践『北の屋台』若い行動力でまちを元気に！……………坂本 和昭
 「体験ボランティア」から学ぶこと……………進藤 芳彦
 地域の活性化に果たす教育の役割

－生涯学習と地域活性化－……………高田 茂
 生涯学習における生きがいと社会参加に関する一考察……………宮本 正敏
 地域社会における体験活動の現状と方向性

－「高校生インターシップ」の実践を事例として－……………吉田 聡

一般論文

携帯電話ホームページによる

北方圏住民向け電子メールシステムの制作に関する研究……………山本 正八
 地域素材を生かした体験的学習の試み

－小学校低学年生活科「北の森たんけん」の実践から－……………塩田 英樹
 生涯健康教育に関する研究

- ー地域と学校の連携ー……………中出 佳操
 北海道の街路樹 8題……………前山 和彰
 北海道浅井学園大学「AOC」講座の生涯学習効果 ……………岡元真理子
 生涯学習系学生たちによるたたら製鉄復元操業……………水野信太郎
 フィンランドのフィギュア・ノート音楽療法
 ー知的障害者の生活の質の向上にむけてー……………山田真知子
 福岡県吉井町における伝統的建造物群の多様な活用……………菊地 達夫
 美濃市町家の修景保存計画 その4
 (岐阜県美濃市住民へのアンケート調査について) ……………野口英一郎
 養護教諭および保健室に関する研究(1)
 ー大学生の持つ養護教諭と保健室の印象からー……………今野 洋子
 ※第8号では、学外からの6名の方が、特集「地域の活性化に果たす生涯学習の役割」
 にご執筆くださいました。行政関係者、地域の実践者、民間の方々の連携の重要性を
 確認できました。

9) 第9号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

- THE-HAIKUー俳句を作品にー……………阿部 典英
 宙シリーズ 05ー3 (油彩)……………野崎 嘉男
 眼を閉じて……………林 亨
 旧岡田邸の水廻り整備工事……………水野信太郎
 冬の終わりから春へ、そして秋へ(写真)……………藤原 等

特集論文

「北海道の生涯学習」美術館におけるコミュニケーション

ー西村計雄記念美術館の実践からー……………磯崎亜矢子

これからの時代のボランティア活動と生涯学習

ーより豊かな社会の創出をめざしてー……………伊藤規久子

「共に学ぶ喜びを分かち合おう」を合言葉に

ー苫小牧市障害者パソコンボランティア友の会との協働についてー……………高橋 徹

北海道長沼町の生涯学習によるまちづくり……………谷川 松芳

「地域教育」の推進ー石狩市の現状についてー……………百井 宏己

一般論文

北海道厚真町において学芸員課程の学生が行った博物館ボランティア活動……………三野 紀雄

「友達」「遊び」「学習」から見た子どもの生活意識

ー北海道A市の子どもを対象とした調査よりー……………今野 洋子

手動ふいごを用いたたたら製鉄復元操業……………水野信太郎

携帯電話ホームページによる単位取得確認に関する研究……………山本 正八
 小学校学習指導要領社会科における地域学習の検討……………菊地 達夫
 身近にある帰化植物 8 題……………前山 和彰
 子育て・子育てのライフストーリー (2)

ー農業後継を希望する青年からの聞き取りー……………請川 滋大
 美濃市町家の修景保存計画 その5

(岐阜県美濃市の修景保存計画案) ……………野口英一郎
 北方圏におけるサケマスの栄養成分と料理……………羽田野六男 山崎 圭子
 高齢者の上肢動作とブラウスの袖との関係

……………高岡 朋子 富田 玲子 泉山 幸代 大信田静子
 北村 悦子 辻 美恵子 永田志津子 福山 和子
 地域活動を通じての学校・教育委員会・地域社会の連携実態……………菊地 達夫 川村 道夫

※第9号では、「北海道の生涯学習」として特集を計画し、それぞれの分野でご活躍の皆様
 に執筆を依頼し、本紀要発行の趣旨である地域社会との連携という目的に沿うもの
 となりました。

10) 第10号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

九州の赤煉瓦……………水野信太郎
 宙シリーズ 06-2 ……………野崎 嘉男
 冬の終わりから春へ、そして秋へ (2) (写真) ……………藤原 等
 眼を閉じて……………林 亨

特集論文

大学と地域で創る生涯学習活動の研究

ー後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み (1) ー
 ……………藤原 等 高岡 朋子 菊地 達夫 酒井 宏三 他
 大学と地域で創る生涯学習活動の研究

ー後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み (2) ー
 ……………高岡 朋子 菊地 達夫 酒井 宏三 藤原 等 他
 大学と地域で創る生涯学習活動の研究

ー後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み (3) ー
 ……………酒井 宏三 藤原 等 高岡 朋子 菊地 達夫 他
 大学と地域で創る生涯学習活動の研究

ー後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試み (4) ー
 ……………菊地 達夫 藤原 等 高岡 朋子 酒井 宏三 他

一般論文

水中浮遊位での運動プログラムの効果

～身体機能のうち歩行能力や立ち座り能力について～……………上田 知行 浅尾 秀樹
生涯スポーツ（スキー）の技術・指導について……………竹田 唯史
健康・生活系学生の木材加工体験学習……………水野信太郎

プリントメディア制作におけるスケールの概念形成に関する研究（2）

ープリントメディア制作時のユーザー行動の分析ー……………福田 大年
学生募集定員割れを防ぐ新カリキュラムの提案に関する研究……………山本 正八
生涯学習における声楽分野継続学習の方向性……………岡元真理子
子どものための体験教室における学習材の開発と指導方法の工夫

～子どもの居場所づくりから自己実現をめざして～……………那賀島彰一
大学と地域で創る生涯学習活動の研究

ー後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試みー

美術分野 親子向けワークショップ「身近な材料で風づくり」

ー羊蹄の風と楽しく遊ぼうー実践報告……………佐々木光子 野崎 嘉男
大学と地域で創る生涯学習活動の研究

ー後志地方におけるワークショップによる地域共同活動の試みー

美術分野 親子向けワークショップ「身近な材料で風づくり」

羊蹄の風と楽しく遊ぼう 2 年間の実施・アンケート結果の比較……………佐々木光子
子どもが考える将来像から見た現代の教育課題……………佐々木浩子 今野 洋子
持続可能な地域保健活動の要因……………中出 佳操
三次元計測による高齢者の体型分類と人台製作

ー市販ボディと特異体型との比較ー……………大信田静子 高岡 朋子
ドイツにおける職業訓練の機能体系……………田口 智子
自然地理巡検の実施形態と効果……………菊地 達夫
美術と社会の連動の試み 1ー絵画の場合展における作品レンタルプロジェクトー

……………林 亨 堀田真紀子 大井 敏恭

※生涯学習研究所の地域共同研究の研究テーマである「大学と地域で創る生涯学習活動
の研究」の研究成果を特集として掲載しています。

11) 第11号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

ステンド・グラス物語……………水野信太郎
宙シリーズ 07ー8……………野崎 嘉男
眼を閉じて……………林 亨
冬の終わりから春へ、そして秋へ（3）(写真)……………藤原 等
テキスタイルによる舞台美術の創造……………戸坂恵美子

美濃市の町家……………野口英一郎

特集論文

大学と地域で創る生涯学習活動計画構築の研究（Ⅰ）

～まちづくりにおけるミュージアムロードの位置づけ～

……………谷川 松芳 酒井 宏三 高岡 朋子 加藤 隆

大学と地域で創る生涯学習活動計画構築の研究（Ⅱ）

～俱知安町における生涯学習活動としてのワークショップの事例から～

……………高岡 朋子 加藤 隆 上田 知行

一般論文

日本における余暇行政（3）～黒松内の生涯学習システム～……………粥川 道子

カナダ国・アルバータ州におけるバドミントン競技の強化策について

……………北村 優明 小島 一夫

日本・韓国・中国の強化体制による各国のダブルスの戦型の特徴について

－第13回日・韓・中ジュニア交流競技北海道大会から－

……………北村 優明 竹田 唯史 小島 一夫

大学生スキー選手育成に関する実践的研究

－基礎スキー選手を対象として－……………竹田 唯史 近藤雄一郎 川口 城二 山本 敬三

スピードスケート競技における高校生を対象としたメンタルトレーニングについて

……………竹田 唯史 小松 洋介

車いすダンスサークルの実践とその効果……………増山 尚美

地域振興装置としての石川啄木……………水野信太郎

札幌市営地下鉄の収益向上のためのシステムプランニングに関する研究……………山本 正八

自尊感情と食生活の関連について－高校生の実態調査より－

……………丸岡 里香 百々瀬いづみ JJフランク 中出 佳操

社会科教育における博物館活用の実践と意識

－小学校教員養成課程の取組を中心として－……………菊地 達夫

第16回冬季デフリンピックアルペンスノーボード競技におけるサポート実践について

……………山本 敏美 竹田 唯史 安藤 直哉 近藤雄一郎

キッズを対象としたエアロビックの指導について

……………竹縄 愛美 竹田 唯史 菊地はるひ 中川 功哉

韓国の体操選手育成における学校体操部の役割と現状について

……………中村 剛 韓 允洙 田 光子 佐藤 晋也

サッカーにおける初心者を対象とした指導理論について……………伊藤 烈 竹田 唯史

※第10号に引き続き生涯学習研究所の地域共同研究「研究活動計画構築の研究」の研究
成果を特集としています。

12) 第12号の作品発表・論文及び制作者・執筆者

作品発表

- 冬の終わりから春へ、そして秋へ (4) (写真) 藤原 等 (1)
 石川啄木少年期の生活空間 水野信太郎 (9)
 眼を閉じて 林 亨 (15)

論文

- 大学と地域の連携～音楽を中心にコミュニティーづくり～
 岡元真理子 千葉 圭説 永留 淳也 村井 俊博 (17)
 ウェスタンオンタリオ大学および附設Canadian Center for Activity and Aging視察報告
 堀内 雅弘 (29)
 学校と地域連携の構築に関する研究～フィンランドとの比較研究における序章～
 加藤 隆 浅井 貴也 小杉 直美 佐々木邦子 (43)
 子どものための体験教室における指導法の工夫とその実践 那賀島彰一 (61)
 新学習指導要領における小学校社会の地理的内容とその特色 菊地 達夫 (69)
 養護教諭の実践力育成をめざした学習の展開－「養護学演習Ⅰ」「養護学演習Ⅱ」の授業例－
 今野 洋子 (81)
 生涯学習系学生の木工体験学習 水野信太郎 (93)
 The Study of Wooden Treatments by Students of Hokusho University MIZUNO, Shintaro (108)
 ジュニア選手育成に関する実践研究－ バドミントン競技のジュニア選手を対象として －
 北村 優明 小島 一夫 (109)

報告

- 生涯学習研究所研究紀要「生涯学習研究と実践」のあゆみ 谷川 松芳 (127)



生涯学習研究と実践